

古河電、AIで通信部材の拡大見込む 野村アセットの福田氏 – 注目投信に聞く 情報エレクトロニクスファンド

2025/07/08 05:00 日経ヴェリタス 1280文字

野村アセットマネジメントの「情報エレクトロニクスファンド」は、電機などエレクトロニクス分野や情報通信関連の日本株に投資する。ファンドの特徴や運用方針について、福田泰之チーフ・ポートフォリオマネージャーに聞いた。

——投資信託の特徴を教えてください。

「電機や精密機器といったエレクトロニクス関連や、情報ソフトウェアや通信などの企業群から、株価が割安な銘柄に投資する。新型コロナウイルス禍を経て、IT（情報技術）を活用した生産性改善が日本企業の長期課題として浮き彫りになった。IT分野への投資拡大が今後も中長期で見込まれ、市場の成長余地は大きい。投資指標の水準や業績の成長性を踏まえてボトムアップで銘柄を選別している」

「形式的な業種区分にこだわらず、運用方針に沿った銘柄であれば幅広く投資する点もファンドの特徴だ。例えば電線メーカーの古河電気工業（5801）。業種でいえば非鉄金属だが、高速インターネットの回線網整備や人工知能（AI）関連の需要拡大に注目して組み入れている」

——どんな銘柄が運用成績に寄与してきましたか。

「ソニーグループ（6758）は高度な映像解析や画像処理技術を生かし、ゲームや映画といったエンターテインメント領域を中心に利益成長が続く。国内ITサービス市場でトップクラスのシェアを持つ富士通（6702）も、製造業からサービス業への業態変革を進め、企業のIT投資を取り込んでいる」

「日本でも資本効率の改善が上場企業に強く求められるようになった。この2社のように、事業構造改革に先んじて乗り出した企業は株価の成長も期待できる」

——エレクトロニクスはいわゆる景気敏感株が目立つ分野です。「トランプ関税」を巡って景気の不透明感が強まっていますが。

「投信のコンセプト上、景気や株式市場が大きく落ち込んだ際にパフォーマンスを守る手段が乏しいのではと懸念する向きもあるが、そうした局面では外部環境に左右されにくい『安定企業』を増やすことでディフェンシブ性を高める工夫をしている。例えば、最近ではNTT（9432）を買い増した」

「景気動向の影響を相対的に受けづらい中小型株にも注目している。中小型株は独自のビジネスモデルを持ち競争力が優れた企業が少なくない。現在のポートフォリオには時価総額が300億円程度の銘柄も入っている」

——目先の投資環境をどうみていますか。

「ITインフラ・サービスは社会の構造変化に不可欠な存在だ。クラウドやデータセンター、高速通信規格『5G』、AIなどテーマは様々だが、いずれも実需が底堅く、その意味で投機が先行した過去のITバブルとは様相が異なる。株価水準も総じて割高感はない」

「足元の日本株をみると、コロナショックからの上昇トレンドが落ち着きつつある。米国の関税政策によっては調整局面に入ることも想定しているが、それも長くは続かないだろう。買いのチャンスを見逃さず、長期的な運用パフォーマンス向上につなげたい」

（聞き手は阿部真也）

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。
本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。
本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。
Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.

許諾番号30104495 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。